

## トピックス

ICAAP がやってくる 第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議に向けて  
第2回 一つの希望 多様な試練

宮田 一雄

Kazuo MIYATA

産経新聞編集局

英語の辞書には「ギリシャ神話に出てくるアトラスの7人の娘、転じて夜空に輝くすばる座の7つの星」と説明されている。米東部の名門7女子大や世界の石油大手（メジャー）7社の愛称にもなった。日本でいえば「三羽鳥」や「四天王」といった感覚だろうか。英語圏の人々は歴史的にセブン・シスターズ（7姉妹）がお気に入りのようだ。

地球人口の6割を超えるアジア・太平洋地域は、言語も生活習慣も文化的背景も多様であり、英語圏の国ばかりが幅を利かせているわけではもちろんない。ただし、アジア・太平洋地域エイズ国際会議（ICAAP）の公用語が英語であるせいか、ここでもセブン・シスターズはしっかり存在感を発揮している。神戸で開かれる第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議（7th ICAAP＝神戸会議）の特徴と重要性をより深く理解していただくため、今回はエイズとの闘いの鍵をにぎる7姉妹を紹介しよう。

## ◇エイズと闘うコミュニティ

前回は紹介したように、神戸会議は「ブリッジング・サイエンス・アンド・コミュニティ（科学とコミュニティの英知の統合）」がテーマになっている。それではコミュニティとは何か。改めて尋ねられると、答えるのは結構、難しい。

コミュニティはもともと地域共同体としてとらえられていたようだが、都市化が進む現代ではもはや地理的概念だけではとらえきれなくなっている。たとえば、東京の人口何万という大規模団地の片隅で細々と暮らしている私などは、同じ棟に住んでいる人さえあまりよく知らない。会えば「こんにちは」程度の挨拶はするが、よほどのトラブルでも起きない限り、隣人との接触には乏しい。何年か前に隣の老夫婦宅で小火騒ぎがあり、原因は長男のタバコの火の不始末と分かった。それで初めて老夫婦が息子と同居していたことを知ったほどで、同じ団地に住んでいるからコミュニティという実感は希薄である。

日本では一時期、会社が運命共同体的な求心力の強いコミュニティで有り得るのではないかといった議論もあった。日本は社会主義ならぬ会社主義だなどと語る人もい

た。しかし、デフレとリストラの世の中で、いまだに本気になってそんなことを考えている人はそう多くはないだろう。

居住地でも、勤務先でもないとしたら、現代のコミュニティはどこにあるのか、と強引に論理を引っ張ってきたのは他でもない。1980年代の後半から90年代にかけて、新たな社会的現実にあわせた新しいコミュニティの概念が必要だなどと盛んに言われ始めたところに、なんと、大きなヒントを与えてくれたのが実はHIV/エイズの流行でし—ということを強調するためである。

1994年の第10回国際エイズ会議（横浜会議）では、HIV感染者やNGOの参加を促進するため、組織委員会の中に事務局と同格のコミュニティ・リエゾン委員会が設置された。その委員会の代表で、今回の神戸会議の組織委員でもある池上千寿子さんは「HIVに感染している人や支援活動を続けている人、エイズ治療に携わる医療関係者、HIV感染予防の対象とされる人たちなどで構成されるコミュニティ」としての「HIVコミュニティ」の存在を想定し、次のような興味深い指摘を行っている。

「<都会を中心にした人口移動の活発化と交通、通信手段の発達に伴い、コミュニティは地域という空間の共通性を基盤にした集団としてだけでなく、課題の共通性によってつながる集団、さらには価値観や気分を共有する比較的ゆるやかな集団をとらえる際の概念としても注目されるようになっている。社会の中に新たな補助線を一本、引いてみると、さまざまな問題の所在やその解決の糸口が見えてくるといったことがしばしば生じるようになったからだ>」（エイズ&ソサエティ研究会編『エイズを知る』より）

こうしたコミュニティの概念を踏まえ表1をご覧ください。ここにあげた7つの国際ネットワーク組織の連合体がICAAPを支えるセブン・シスターズである。

7組織の代表は、マレーシアのクアラルンプールで開かれた1999年の第5回アジア・太平洋地域エイズ国際会議の後、HIV/エイズとの闘いを協力して進めるための話し合いを重ね、2001年2月にセブン・シスターズを旗揚げした。7姉妹はそれぞれ、どんなコミュニティを基盤として

表 1 セブン・シスターズ構成メンバー

団体名	コミュニティ
ASAP (AIDS Society of Asia and the Pacific)	HIV/エイズ研究者
APCASO (Asia Pacific Council of AIDS Service Organization)	エイズ・サービス組織
APN+ (Asia Pacific Network of People Living with HIV/AIDS)	HIV 感染者
APNSW (Asia Pacific Network of Sex Workers)	セックスワーカー
AHRN (Asian Harm Reduction Network)	薬物使用者
AP-Rainbow (Asia-Pacific Network of Lesbians, Gays, Bisexuals, and Transgender)	レズビアン・ゲイ・両性愛者・トランスジェンダー
CARAM-Asia (Coordination of Action Research on AIDS and Mobility)	移住者

いるのか。

まず、ASAP は HIV/エイズ研究に取り組む研究者の組織であり、UNAIDS とともに ICAAP のスポンサー団体にもなっている。HIV/エイズに関する研究といえば、HIV というウイルスの研究、エイズという病気の治療に関する研究などがすぐに思い浮かぶ。素人の新聞記者に持ち上げられたところで、誇り高き研究者の皆さんはうれしくも何ともないでしょうが、それらの研究分野の重要性はいくら強調しても強調し過ぎることはないはずだ。ただし、HIV/エイズの研究がそれだけにとどまるものではないことも同時に強調しておく必要がある。

HIV/エイズ研究の領域は保健、医療だけでなく政治、経済、社会、文化、芸術などさまざまな分野にまたがっている。日本エイズ学会自体がすでにそうした現実を反映した構成になっているので、いまさらくどくどと説明するのも気が引けるが、現在の ASAP の会長がオーストラリアの政治学者、デニス・アルトマン氏であるという事実ひとつをとってみても、研究者組織としての ASAP の間口の広さはお分かりいただけるだろう。

誤解のないように大急ぎで付け加えておけば、このことは医学分野の研究者の存在感が薄れたとか、発言力が低下したとかいうことではまったくない。エイズの流行という困難な現実にはひるむことなく切り込み、こうした研究者組織を生み出してきたのは医学分野の研究者の功績であり、今後も医学がエイズとの闘いの大きな柱であり続けることに疑いを差し挟む余地はないだろう。

いずれにせよ、ASAP という研究者組織が ICAAP の運営についても、セブン・シスターズというコミュニティの連合体の中でも、重要な位置を占めていることは特筆しておかなければならない。エイズとの闘いの中で、研究者はコミュニティに協力したり、連携したりする存在ではなく、エイズと闘うコミュニティの当事者そのものなのである。

#### ◇バルナラブルな集団

神戸会議の会議概要(表 2)を見ると、セブン・シスターズのうち、ASAP 以外の 6 つのネットワーク組織は、アジア AIDS 関連 NGO 連合 (6 団体) として共催団体に名を連ねている。日本語にすると、ASAP も他の 6 つのネットワーク組織も同じように共催団体となっているが、英語では ASAP は UNAIDS とともに会議のスポンサー、他の 6 団体はコスポンサーであり、位置付けはやや異なっている。

これは ICAAP が研究者中心の会議として出発し、回を重ねるごとに現実に対応できるよう徐々に性格を変えていったことの反映と見ていだろう。したがって、ASAP が主役で、他の 6 団体は脇役といったとらえ方は必ずしも正確ではなく、日本語の会議概要の方がむしろ現実をよく表しているということもできそうだ。

APCASO は、アジア・太平洋各国で HIV 感染者の支援や人権擁護、感染予防啓発などの活動を続けている非営利の民間団体、いわゆるエイズ・サービス組織 (ASO) の連

表 2 会議概要

期 間	2003 年 11 月 27 日 (木)~12 月 1 日 (月)
会 場	神戸国際会議場, 神戸国際展示場, ポートピアホテル
主 催	第 7 回アジア・太平洋地域エイズ国際会議 組織委員会
共 催	国連合同エイズ計画 (UNAIDS), アジア・太平洋エイズ学会 (ASAP), アジア AIDS 関連 NGO 連合 (6 団体), 日本エイズ学会, (財)エイズ予防財団
言 語	英語 (プレナリーセッション, シンポジウムの一部, 開会式, 閉会式には同時通訳がつかます)
	詳しくは会議ウェブページをご覧ください。
	URL : <a href="http://www.icaap7.jp">http://www.icaap7.jp</a>

合体であり、セブン・シスターズの事務局の役割も担っている。

エイズ・サービス組織の世界規模の連合体としては ICASO (国際エイズ・サービス組織連合) があり、名前で分かるように APCASO はその ICASO を構成するアジア・太平洋 (AP) の組織でもある。

ICASO のリチャード・ブルジンスキー代表は国連エイズ特別総会最終日の 2001 年 6 月 27 日、エイズ NGO を代表して名演説を行っている。前回も書いたように、エイズ特別総会で採択されたコミットメント宣言は、コフィ・アナン国連事務総長が「HIV/エイズとの戦争の明確なバトルプラン (戦闘計画)」と記者会見で強調し、国連の全加盟国が本腰を入れて HIV/エイズの流行と闘うことを約束した重要文書である。

ただし、国連は加盟各国の思惑と利害がぶつかり合うマルチ (多国間) の国際交渉の場であり、その交渉が一筋縄ではいかないことは、イラク攻撃をめぐる安保理の一連の議論を振り返るだけでもお分かりいただけるだろう。国連エイズ特別総会のコミットメント宣言もまた、多国間の錯綜した思惑と利害の調整の上に成立した妥協の産物であることは免れなかった。

いくつかの大きな対立点の中でも最後までもめたのが、エイズとの闘いの焦点ともいえるべき「バルナラブルな人々」の扱いである。

「バルナラブル」は直訳すると「弱い」「傷つきやすい」という意味で、コミットメント宣言の文脈では「社会的に HIV に感染しやすくなるような立場に置かれた」といったニュアンスで使われている。そうした「バルナラブル」な人々を支援し、HIV/エイズと闘うことができるように、つまりエイズを発症した人、HIV に感染した人は必要な治療を受けられるように、HIV に感染していない人は感染を防ぐための手段がとれるように、社会的な条件を整える必要がある。このあたりまではまあまあ合意が成立した。問題は支援すべき「バルナラブルな人々」のリストを具体的に宣言の中で列挙すべきかどうかだった。

宣言の第二次草案では、「バルナラブルな人々」として、女性や子供、難民などとともに、「男性とセックスをする男性 (MSM)」「セックスワーカーとそのパートナー、客」「薬物注射使用者とその性的パートナー」「受刑者」などが示されていた。HIV に感染しやすい立場の人たちがエイズ対策と取り組めるよう、各国は列挙されたグループに対する社会的な差別の解消に努力し、国のエイズ対策に当事者として意見を反映させる機会を保証するなど、積極的に支援していく必要があることを強調するためだった。

バルナラブル論争は、ヨーロッパ連合 (EU) 対イスラム諸国の構図となり、NGO の多くは EU を支持して具体的

に集団を列挙するよう求めた。一方、イスラム諸国は同性愛者やセックスワーカー、麻薬使用者などを支援することに強い反発を示し、列挙に反対した。エイズ特別総会の 5 か月前の 2001 年 1 月に民主党のクリントン政権から共和党のブッシュ政権に移った米国も列挙反対の立場だったと伝えられている。

結論を先に言えば、「バルナラブルな人々」の列挙は宣言に盛り込まれなかった。EU および NGO グループが最終段階で譲歩の道を選択したからであり、NGO が最後の最後で列挙を断念したのは、宣言そのものが流れてしまっただけでなく、失うものが大きすぎると判断したからだった。オブザーバー資格の市民社会代表の一人として、コミットメント宣言採択後、国連総会議場の演壇に立ったブルジンスキー氏は空席の目立つ各国政府代表団席に向かって次のように宣言した。

「私たちがエイズの流れを変え、HIV の感染率を下げ、何百万もの人の命を救おうとするのなら、そしてこの地球規模の流行に何らかの影響を与えたいと考えるなら、HIV 感染に最もバルナラブルな人々、予防のための教育を必要としている人々、治療とケアを求める人々のグループを特定することをためらってはならない。あなたたちはそのグループの名前をあげることはできないと決めた。だが、私にはできる。そこには男性とセックスをする男性、薬物注射使用者とそのパートナー、セックスワーカーとその客が含まれている」

この瞬間、コミットメント宣言からは消えた「バルナラブルなグループ」の具体的なリストが復活し、国連の記録にとどめられることになった。より大きな成果のためにはあえて妥協も辞さない。だが、自らの主張はきちんと記録に残しておく。NGO はそうした戦略を選んだのだ。

#### ◇最前線に立つ人々

セブン・シスターズの基盤となる「バルナラブルなコミュニティ」には HIV 感染者のコミュニティも含まれている。ただし、HIV に感染した人たちが社会の中で安心して暮らしていけるかどうかは予防対策の成否を左右する重要なファクターであり、支援は「かわいそうだから助ける」といった意味合いのものではない。また、感染者のコミュニティ自体もそのようにして社会の外側に置かれることは望まないのではないかと。

APN+ はアジア・太平洋地域の HIV 感染者のネットワークであり、日本では昨年 4 月に旗揚げした HIV 感染者グループ「JaNP+」が国内窓口になっている。JaNP+ の代表の長谷川博史さんは神戸会議組織委員会の PWA ラウンジ小委員会の委員長でもあり、会議のキーパーソン中のキーパーソンとっていいだろう。

蛇足の説明を付け加えておけば、「PWA」はピープル・リビング・ウィズ・エイズ。対象は文脈によって異なってくるが、ここでは「エイズを発症した人も含む HIV 感染者」と解釈しておくことができる。PWA ラウンジは会議に参加する PWA が安心してくつろいだり、交流したりできるように会場内に設けられる部屋のことで、横浜の国際エイズ会議で開設され好評だった。PWA 参加の重要性は前回も強調した通りで、横浜以降の世界および地域規模のエイズ会議でも PWA ラウンジは不可欠な要素となっている。

長谷川さんを中心とする PWA ラウンジ小委員会は、期間中のラウンジの運営および会議初日に予定されている HIV ポジティブ・フォーラムの開催を担当する。

AP-Rainbow は同性愛者・両性愛者・トランスジェンダー (LGBT) のネットワークで、レインボーで表現される「七色の虹」は性的指向、ジェンダーの多様なあり方を示している。神戸会議組織委員で、AP-Rainbow の日本での窓口になっているアカー (動くゲイとレズビアン) の柏崎正雄さんによると、1999 年のクアラルンプール会議期間中にゲイ・レズビアンが中心となって E メールリストを作り、2001 年のメルボルン会議で初総会を開催した。セブン・シスターズで最も新しい組織であり、いわば末娘だという。

ただし、アジア・太平洋地域のレズビアンとゲイのコミュニティは、それ以前にも口頭演題やシンポジウム、サテライト・ミーティングなどを通して ICAAP に積極的に参加しており、コミュニティとしての存在感は小さくない。柏崎さんによると、93 年にインドのデリーで開かれた第 2 回 ICAAP では、「ゲイ」「レズビアン」という言葉さえ使えず、「オルタナティブ・セクシャリティ」と表現されていたという。AP-Rainbow の創設には、それからほぼ 10 年の歳月とコミュニティの担い手たちによる困難な努力が必要だった。

APNSW はセックスワーカー自身が中心になって作るアジア・太平洋地域の NGO ネットワーク組織で、政治的に組織の存在を公にできない 2, 3 の国を除くすべての国・地域から NGO が参加している。セックスワーカーとその支援者からなる NGO の世界組織としては南アフリカに本部を置く NSWP (ネットワーク・オブ・セックスワーカー・プロジェクト) があり、NSWP および APNSW の日本窓口は神戸会議組織委員の桃河モモコさんが担当している。APNSW の活動について桃河さんは次のように説明している。

「具体的には HIV/エイズを含む感染症の予防啓発や性的健康の増進、客や経営者や警察からの (性暴力を含む) 暴力対策、ワーカーの人権に基づく労働状況・法律・条例

の見直しと提言など、地域に応じた活動、そしてそのために必要なエンパワメントや教育をセックスワーカー同士で行っています。各国での活動の他に西アジア、東南アジアといった地域ミーティングを随時、行っていますが、ICAAP もその一つの間として活用することで、今まで重要な成果を上げてきました」

日本には SWASH (セックスワーカー・アンド・セクシュアル・ヘルス) というグループがあり、桃河さんは「SWASH のコーディネーターで、現在は主に APNSW 窓口担当でもあります」という。

「なお、よく間違えられるのですが、NSWP も SWASH も、その名前には「セックスワーカー」ではなく、「セックスワーカー」という言葉を使っています。これは、このプロジェクトの健康促進の対象がワーカーだけでなく客も含むこと (ワーカーにとっても客にとっても安全なセックスが行われること)、またワーカーの人権問題は、ワーカーだけの努力で変化するものでなく、ワーカーと客と経営者の三者の関係の中にあるのだということを表明する意味があります」

CARAM-Asia については、日本の窓口となっているシェア (国際保健協力市民の会) の副代表で、やはり神戸会議組織委員でもある沢田貴志さんが詳しい。沢田さんによると、「経済のグローバル化の中で国境を越えて外国で働くアジア人が急増したことに注目し、調査と提言を行っているアジア太平洋地域の NGO の連合体」だという。

国境を越えて働く「移住者のコミュニティ」は (1) 文化的、言語的な壁があり HIV 情報が得にくい (2) 医療機関や支援サービスの存在を知らなかったり、利用できなかったりすることがしばしばある (3) 金銭的に困窮している人が多いなどの点で HIV 感染にバルナラブルな立場に置かれている。

移住者のコミュニティは日本国内にも存在しているし、逆に他の国には日本人移住者コミュニティも形成されている。私もニューヨークで生活した経験があり、(3) はともかく、(1) と (2) に関してはニューヨークに住む日本人が HIV 感染に関し十分、バルナラブルであると痛感した。ニューヨークには APICHA (アジア・太平洋諸島民のための HIV/AIDS 連合) というエイズ対策組織が活躍しており、JAWS (ジャパニーズ・エイズ・ワークショップ・シリーズ) という日本人グループも APICHA と協力しつつ活動を続けている。APICHA には日本人スタッフもいるので、ニューヨークに行かれる方には、チャイナタウンにあるオフィスを訪問されることをお勧めしたい。

CARAM-Asia は 2002 年 7 月、バルセロナで開かれた第 14 回国際エイズ会議で、移住者の HIV 感染に関する調査

をもとにマニュアルを公表している。このマニュアルは移住者の出発前、到着後、帰国後復帰の三段階ごとに、どのような政策、支援が必要なのかを分析したものだという。バルセロナ会議以降、さらに分析が進められているはずであり、神戸会議ではその成果も報告されることになるだろう。

AHRN は薬物使用者を対象にした NGO の連合体である。日本では薬物注射による HIV 感染はまだそれほど多く報告されているわけではなく、主要な感染経路とはなっていない。ただし、これは薬物使用者が少ないからということではなく、薬物使用者のコミュニティにまだ、本格的に HIV が入っていないからではないかと考えられている。薬物使用者の間に HIV 感染が広がる可能性は日本にもあり、そうなれば日本の HIV/エイズの流行は急激に拡大していくだろうと予測する研究者も少なくない。

残念ながら、私には AHRN の活動について報告できるほどの情報や知識はない。AHRN に詳しい方がいらっしゃるようなら、お話をうかがいたいと考えている。

#### ◇アジアの中の日本

アジアの HIV/エイズの流行は総体としてみればまだ、初期段階にあるというものの、セブン・シスターズの構成を見ても分かるように、感染の要因は多様である。それぞれのコミュニティがそれぞれの感染要因を抱えているといってもいいだろう。

推定感染者数が 100 万人を超えている中国では、薬物注射による感染、売血の際のずさんな安全管理が引き起こした感染、性行為による感染が重層的に進行している。2008 年の北京五輪、2010 年の上海万博といった大プロジェクトを控え、人口の流動性が高くなれば、性行為による感染が一段と拡大することは避けがたい。

インドでは HIV 感染の流行地域が広い国土の中に点在している状態だが、それでも南アフリカに次いで世界で 2 番目に大きな感染者人口を抱えている。地域的な格差、貧富の格差、コミュニティ間の情報の格差、さまざまな格差の解消が感染拡大防止の鍵になる。

コンドーム普及を中心にした予防対策が成果を上げたタイやカンボジアは、その成功を持続させることができるのか。アジアのイスラム諸国は今後、「バルナラブルなコミュ

表 3 神戸会議プログラム委員会

トラック A	Basic and Clinical Sciences (基礎科学と臨床科学)
トラック B	Treatment, Care and Support (治療, ケアと支援)
トラック C	Prevention and Epidemiology (予防と疫学)
トラック D	Culture, Gender and Sexual Issues (文化, ジェンダーと性的諸問題)
トラック E	Political, Economic, and Social Contexts (政治, 経済と社会)

ニティ」にどのように対応するのか。ミャンマーやベトナムはどうか。そして、日本は…。

厚生労働省の「HIV 感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究班」の将来予測によると、2006 年末時点で日本人の性感染による HIV 感染者数は約 2 万 2000 人、死者も含む累積エイズ患者数は約 5000 人と推定されている。アフリカ諸国はもちろん、大方のアジア・太平洋諸国と比べても少ないが、増え方は 5 年間で感染者数が 2.1 倍、累積エイズ患者数が 2.9 倍。急増とっていい。私たちの課題は何なのだろうか。

多様なコミュニティが抱える気の遠くなるほどたくさんの課題の一つ一つに目配りをしていく機会が、日本にいながらにして得られるという点でも、神戸で ICAAP が開催されることの意義は私たちにとって大きい。神戸会議のプログラム委員会はそれらの課題に対応するため、表 3 に示した 5 つのトラックに分けられている。

また、このほかにも先ほどの HIV ポジティブ・フォーラムやコミュニティ・フォーラム、スキルズ・ビルディング・ワークショップ、サテライト・プログラム、文化プログラム、ブース展示などが予定されている。会議最終日の 12 月 1 日は世界エイズデーでもある。会場外の一般市民向けのプログラムも充実したものにすべく、神戸市、兵庫県、エイズ予防財団などの協力を得て準備が進められている。最終回となる次回は、日本にとっての会議の意味を考えつつ、具体的にプログラムの中で「科学とコミュニティの英知と統合」はどのように実現されようとしているのかを見ていくことにしよう。